

富士の煙のはて

土田龍太郎

阿佛尼の號なにて今に知られたる安嘉門院四條、譽れめでたき歌人たりしかども、夫藤原爲家
みまかりて後、わが子爲相に和歌の家の遺跡ゆみせきをことゆゑなく嗣むそちがしめむとて、はや六十路過
ぎにし身のよろづはかなきをもかへりみでいざよふ月にあくがれゆくがにはるか鎌倉さし
てすずろに東路の旅に出でつるは弘安二年十月十六日のことにぞありける。

十日ほど經て清見瀬のほとりに宿りたれど、この日はるかに富士の高嶺を仰ぎ見しどきの
こと十六夜日記には左のごとくに敍べたり。

富士の山を見れば煙も立たず。昔父の朝臣に誘はれて、いかになるみの浦なればなど詠みし
ころ遠江の國までは見しかば、富士の煙の末も朝夕たしかに見えしものを、いつの年よりか
絶えしと問へばさだかに答ふる人だなし。

たが方になびきはててか富士の嶺の

けぶりの末の見えずなるらん

古今の序のことばまで思ひ出でられて

いつの世のふもの塵か富士のねを

雪さへたかき山となしけん

朽ちはてし長柄の橋を作らばや

富士のけぶりも立たずなりなば

こよひは浪の上といふ所に宿りて、荒れたる音左右に目も合はず。

父の朝臣とは繼父なる平度繁にて阿佛いまだ若きころこの度繁に伴ひて鳴海の浦を過ぎし
ときにものせるなる

これやさはいかになるみの浦なれば

思ふかたには遠ざかるらむ

てふ一首、續古今集驕旅の部に入れり。昔この歌詠みたりしは朝夕たしかに見えし富士の煙
のこたびはさらに見えるはいつのまにいづくになびきはてぬるやらむてふいぶかしさに
たへぬままに口遊めるが、たがかたに云々の一首にてぞある。

そも富士の煙を大和歌に詠みこむためしいとあまたにて數へあげむにいとなきはさるこ
となれば、世々の歌人の詠草をけみせむに、阿佛のこの一首におもむきかよへりやにおぼゆ
るをここかしこに尋ね出でむこと必ずかたきわざにしもあらざるべし。

わけてまづわが心におのづと浮びくるは、西行法師の富士の嶺を仰ぎて詠めける一首に

て、この歌ものせしときのさま西行物語より引きみるべし。

遙かに富士の高嶺を見上ぐれば、折知り顔の煙立ちのぼり山の半ばは雲に隠れ麓に湖水をたたへ南には郊原あり前には蒼海漫々として釣漁の助けに便あり。都を出でて多く山川江海をしのぎし旅の憂さもここに少し忘るる心地しておぼえける。

風になびく富士の煙の空に消えて

行方も知らぬわが思ひかな

いつとなき思ひは富士の煙にて

まどろむほどや浮島が原

ここに載れる兩首の内、今ことに勘へまほしきは、風になびくてふ初めの一首なれど、この歌につきて新古今集にはただ、東の方へ修行し侍りけるに富士の山をよめる、とばかり記し、西行上人集には詞書なし。この歌、富士の煙のすでに空に消えにし後のさまを詠めるにまぎれなけれど折知り顔の煙立ちのぼりと詞に云へるとはあひかなはざるがごとくにおぼゆれば、この物語の説きざまそも西行の本の意にかなへりやいなや疑はしきふしなきにあらず。

同じ歌、新古今集雜中に見ゆれど西行上人集にては戀の部に入りたり。またこれに隣れるいつとなき^{云々}は山家集の戀歌百十首の内にあり。さればには、鈴屋翁その美濃の家づとにて、風になびくの一首を釋きたる末に、されど戀の歌と聞えていかがと云ひて結びたれど、これまことに戀を詠めりやいなやいともいぶかし。

今に遺れる西行詠草の内、この一首の心深きことのものにもにず、え並ぶものとてはたえて見出でがたかるべし。初句と三の句の文字あまりの則にたがへるは本居翁の思へるごとくなれども、これあながちに咎むべきにしもあらず。翁のこの一首をさしもめづることなきはなにゆゑなるらむ、さらに心えがたし。

富士の煙のはるか遠かたになびくままでやがて消えゆくさまをながめやれば、おのが心さへこの煙のあとをしたひつつすずろにあくがれではやまず、わが心ながらわが心ともおぼえねばものぐるほしくあやしきこといふはかりなし。西行の駿河に旅せしはいつのころなりや定かには知られねど、この法師の一期のはてに至りぬるよそ人に及びがたきくすしきさかひを窺はしむるにたれりとせば、風になびくの一首いかに見るとも戀を謳へる歌には見ゆまじきなり。

たが方に^{云々}てふ阿佛の詠みやうげにさとくおもしろき一ふしありとこそ^云ひつべけれ、若きとき見えし富士の煙のはてのいかなればこたびは見えぬぞと疑ひあやしむばかりにてやみぬるがごとくなれば、生き死にのはてにつひにはれやらぬ胸の思ひを述ぶる西行の歌

の奥深きにはたぐふべくもあらじかし。さはれ西行と阿佛の歌の勝り劣りはいかにてもあれ、同じく富士の煙を謳へる兩首、詞と意にあひかよへるおもむきたえて尋ぬまじきにもあらず。阿佛が富士の嶺を仰ぎ見しどき、世に名に立てる西行の詠草をも心にかけむことげにさもあるべくぞおぼゆる。

阿佛また古今集序のことばを思ひ出でてさらに兩首をものしたれど、初めの歌いつの世のふもとの塵か云々は貫之のたかき山もふもとのちりよりなりてと云へるにより、次の歌朽ちはてし長柄の橋を作らばや云々は同じ貫之の今はふじの山も煙たたずなりながらのはしもつくるとなりと云へるによれることまぎれなきなり。

阿佛の富士の歌にゆかりあるは西行の詠草のみにてもあらず。たが筆になりしやはえ知られねど、海道記とて、十六夜の旅の弘安二年より五十年あまり先立てる貞應二年四月、京より鎌倉に下向せし人の道の記今に遺りて富士の頂を仰ぎしときにものせる次の兩首を載せたり、

幾年ノ雪ツモリテカ富士ノ山

イタダキ白キタカネナルラム

トキウツル富士ノ煙ハ空ニキエテ

雪ニ餘波ノ面影ゾタツ

幾年ノ雪ツモリテの句ハ古今序のことばに因めるに似て、またトキウツル云々の歌の富士ノ煙ハ空ニキエテてふ二の句三の句は西行の富士の煙の空に消えてと詠めるにほほ異らず。

されば海道記作者はや阿佛の先に、西行にならひておのが富士の歌をものせしにてもやあるべき。

海道記に並べて人のめできたれるは東關紀行にて、これまた作者たれなりや知らねねど仁治三年の鎌倉下向のさまを述べたり。ここにもまた富士を詠める三首載りたれどいづれにも阿佛の歌にあひかよへるあととては見とめがたし。

阿佛の富士の歌詠みしをり西行の兩首のみならで海道記の兩首をも想ひかけたりけむこと、右に掲げし六首あまりをけみすればおのづとはかり知らるべし。されば阿佛、旅路にありてなに心なくただうちつけに歌詠めりしにてはよもあらじ。心を用ふることねもころにてはなほざりならず。古今序また西行と海道記の歌の意をもとりてやがて兩首をものしたりとおぼゆれば、その巧みおぼろげならず、めでたきことこよなし。

長頭丸隨筆といへる草子あり。長頭丸とは古今傳授相承し和歌連歌俳諧に名を得たる松永貞徳にほかならねど、この草子まこと貞徳の著せるにてはあらず、なにものか知らねど貞徳の名に藉りて、あれのこと筆にまかせて書き列ねしものなり。そが中に阿佛に言ひ及

び、たが方になびきはててか云々の一首をも引き、さらに
是古今の序に今は富士の煙もたたずなりと云よき詠歌也と幽齋公のたまへり。今の余に旅
の日記かく人々にはいさよひの日記をしてては何をか手本にせんと常に仰せられし。
てふ細川幽齋の評語を引きたり。幽齋の十六夜日記をかくまで譽めしはさもありぬべきこ
となれど、ほかにも阿佛の富士の歌にことに心とめてめであへりしもの近き世の人の内に
少からざりけむことげに思ひやるべし。

(令和七年八月三十一日受附)